

茨城県図画工作・美術教育研究部研究調査委員会 授業実践研究報告（令和元年8月）

研究テーマ	豊かな心を養いながら、自らつくりだす喜びを味わう授業の工夫 —中学校第3学年「ともにつくる私たちのゲルニカ 明日への願い」の実践を通して—
筑西市立下館中学校 教諭	

I 研究テーマについて

美術科は、授業時数が週に1時間であり、作品づくりの時間が十分に確保されているとは言えない状況である。その中で、生徒たちに自らつくりだす喜びを味わわせるには、どのような方法があるのだろうか。美術科の教師ならば、誰もが抱えている問題である。人は誰でも絵を描くことができる。初めてクレヨンを持った子どもも、自由に線を描く。これが絵を描くことの始まりである。幼い頃の「描きたい」という気持ちを大事にすることにより、より自らつくりだす喜びを味わうことができると考える。また、中学生という不安定な時期は、すでに表現活動に対して自信を失くしている生徒にとって、手を動かすことが難しいという生徒もいる。また、細かい描写やたくさんの準備物を用意するのを煩わしく思う生徒もいる。そういう生徒がいる中で、上手下手にとらわれない作品に出会ってもらいたいと思い、光の方向や面で形を捉えるような従来通りの作品ではなく、新しい自分を発見し取り組むことに挑戦させたいと考えた。

1年生では、美術の技能を学び、2年生では作品をつくる楽しさを体験し、3年生では「ものをつくる心」を感じてほしい。新学習指導要領解説美術編（平成29年7月）で、美術科の目標（3）の「学びに向かう力、人間性等」に関する目標に「美術の創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を育み、感性を豊かにし、心豊かな生活を創造していく態度を養い、豊かな情操を培う。」と示しているように、美術科の学習を通して豊かな心を養うことを目指している。道徳教育との関連も意識しながら、美術科における表現・鑑賞活動を積み重ねることにより、美術を愛する心情と美術に対する感性を育て、自分の中に新しい世界を発見し、生活における心の潤いと豊かな人間性を養う指導の在り方を追求したい。短い時間の中でも、ものつくる心と心がつながりあえるような授業を目指し、一人一人がじっくり自分と向き合い、心の在り様を表現をするとともに、普段の生活の中でもできることを大切にしながら取り組んでいきたいと考え、本研究テーマを設定した。

II 研究の実際

- 1 題材名 「ともにつくる私たちのゲルニカ～明日への願い～」
- 2 題材の目標
 - ゲルニカに込められたピカソの感情を感じ取り、心豊かに表現しようとしている。
(美術への関心・意欲・態度)
 - 新聞記事を資料として自分の中にある世界から主題を設定し、心豊かな表現の構想を練ることができる。
(発想や構想の能力)
 - 感性や造形感覚などを働かせ、設定した主題に合う表現方法を活用することができる。
(創造的な技能)
 - それぞれ設定した主題の世界や表現の工夫について話し合い、作者の心情や表現意図を感じ取りながら、作品の世界を豊かに味わうことができる。
(鑑賞の能力)

3 題材について

(1) 生徒の実態

- 1 ピカソの作品に、どのような印象をもっているのかを答える問題＜関＞

形が崩れている 17名	落書きみたい 10名	わかりにくい 4名
-------------	------------	-----------
 - 2 3年生になって作品をつくるときに感じていること＜発＞

自分の思いを表現できている 15名	表現が深くなった 13名	上手になった 3名
-------------------	--------------	-----------
 - 3 心に残る作品とは、どのようなものかを答える問題＜鑑＞

自分らしく表現できたもの 13名	丁寧に制作できたもの 10名	最後まで制作できたもの 8名
------------------	----------------	----------------
- (平成30年9月27日調べ 3年1組 31名)

実態調査1の結果から、多くの生徒が、ピカソという形が崩れた落書きのようだという印象をもっていることが分かる。実態調査2の結果から、3年生になり「自分の思うように作品に取り組めるようになった」と感じる生徒が増えていることがわかった。これは、日頃の授業の中で基礎基本を大切にしながら表現することや、それぞれの思いやよさを表現できるように指導をしてきた成果であると考える。ピカソの作品について学習することで、彼の表現の深さと作品への思いを感じさせ、人を感動させる表現の仕方について考えさせたい。「ゲルニカ」という作品を学習することによって、自分たちが生きる世界や社会を見つめ、心豊かにかつ自分の考えをもって生きていくことの大切さを感じ取らせたい。

(2) 題材感

学習指導要領解説美術において、第2学年及び第3学年では、第1学年の内容に加え、自己の内面や社会の様相などを深く見つめ、感じ取ったこと、考えたこと、夢、想像や感情などの心の世界などを基に発想や構想することをねらいとしている。そして、生徒自らが心を動かされたものや自己の表したいことなどを基に発想や構想をすることを重視している。3年生は心身ともに急速な発達がみられ自我意識が強まるとともに、人としての生き方や価値観が形成されていく時期である。そこで、自分たちが生きる社会に対する見方を深め、美術を生活や社会、歴史などの関連で見つめ、自分の生き方との関わりで捉えさせたいと考える。鑑賞と表現を関連させた授業に取り組み、作品や作者に感動するとき、「自分も描いてみたい、つくってみたい。」という表現意欲が湧き起こってくることが少なくない。鑑賞することで表現が、表現することで鑑賞が、より深いものになっていくと考える。

(3) 指導感

生徒たちにとって、ピカソは不可解な芸術家であると考える。その不可解な芸術家によって描かれたゲルニカは、実は新聞報道という現実に起こったことが基となって制作されている。ピカソは当時、新聞報道からゲルニカ爆撃のニュースを知り、その暴力への告発のためにゲルニカを制作した。この作品の時代背景や制作意図を知ることによって、美術作品のもつ意味や価値について理解を深め、美術を愛好しようという心情を育むことができると思われる。

そこで、この題材の指導にあたっては、「報道写真」というものに目を向け、現在の社会情勢に向き合うようにする。これから社会を生きていく中で、平和の尊さや命の尊さについて再確認する上でもこの作品を取り上げる意義は大きい。そこで、鑑賞の指導の充実を図り、美術文化や作品にまつわる人間としての生き方と表現の仕方を学習し自己を振り返ることにより、今を生きることへの感謝やこれから社会に夢や希望をもつ心豊かな生徒を育てたいと考える。現代の報道写真と比べながら、ゲルニカの作品に込められたメッセージを読み取り、ピカソの心情に触れながら、生徒自身の生き方に関わる作品をつくることができるようになら。

4 題材の評価基準

美術への関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
主題などを基に、主体的に構成を工夫して心豊かに表現しようとしている。	イメージを膨らませて感じ取ったことから主題を設定し、心豊かに表現する構想を練ることができる。	材料や用具の特性を生かして設定した主題に合う表現方法を活用することができます。	作者の心情や意図などを感じ取り、心豊かに味わうことができる。

5 指導と評価の計画（7時間扱い）

時	学習内容・活動	評価規準・【評価方法】
1 ①	・原爆ドームのDVDを鑑賞する。	・世界遺産としての原爆ドームを理解をしようとしている。 【観察・ワークシート】

		・原爆ドームの特徴を知り、残していくことへの意義を理解している。	鑑【観察・ワークシート】
2 ①	・ピカソの作品の特徴や「ゲルニカ」と報道写真との関わりについて理解する。	・「ゲルニカ」について、関心をもち主体的に感じ取ろうとしている。 ・「ゲルニカ」を制作したピカソの心情や意図の工夫、美術が社会に与える影響などを感じ取り、自分なりに味わっている。	関【観察・ワークシート】 鑑【観察・ワークシート】
3 ①	・作品の主題を決め、新聞資料から報道写真を選びアイデアスケッチをする。	・イメージを膨らませながら報道写真を選び、感じ取ったことを心豊かに表現する構想を練っている。	発【観察・ワークシート】
4 ③	・アイデアスケッチをもとに、白黒灰色のコントラストを工夫して表現する。	・写真資料を見ながら、コンテや鉛筆を使って白黒灰色の濃淡をつけることができる。	技【観察・作品】
5 ①	・自他の作品を鑑賞する	・それぞれが設定した主題の世界や表現の工夫について話し合い、作者の心情や意図を感じ取りながら作品の世界を味わおうとしている。	鑑【観察・ワークシート】

6 指導の実際

(1) DVD鑑賞 TBS世界遺産「原爆ドーム」

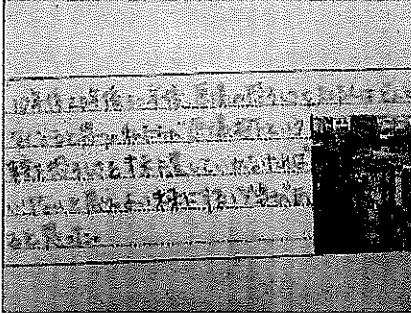
廃墟のまま半世紀にわたって、その場に存在し続ける「負の遺産」である原爆ドームは、なぜ現在の姿になったのか、なぜ廃墟のまま残されるようになったのか。原爆被害を象徴する現在の姿とともに、産業奨励館と呼ばれて広島の産業の中心となっていた戦前の様子や原爆資料館に収められている数々の資料を紹介する。ドーム保存のきっかけとなったある16歳の少女の日記を織り交ぜながら、原爆ドームが世界遺産となった意味を考えた。この授業で、ピカソの「ゲルニカ」と同じ白と黒で描かれた、丸木位里、俊夫妻の「原爆の図」を取り上げ、位里の母の言葉「ピカ（原爆）が落ちなければ」が掲載された新聞記事と合わせて、戦争の恐ろしさやこれからを生きる生徒たちに平和へのメッセージとした。白と黒で描かれた意味を考えながら、戦争の惨禍をどうやって感じ取ればいいのかを静かに考えることができた。



丸木スマ新聞記事



丸木位里・俊「原爆の図」

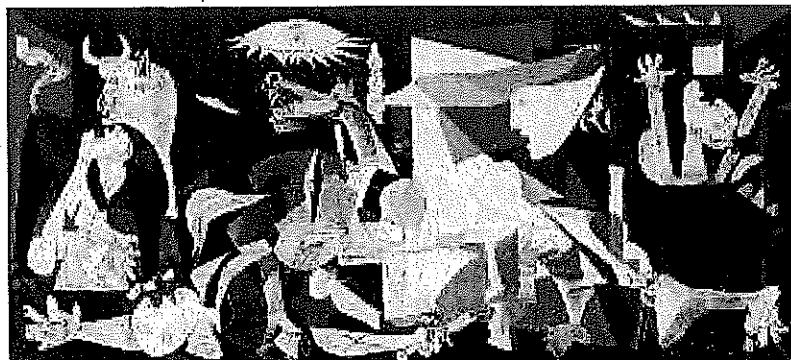


原爆ドーム生徒コメント

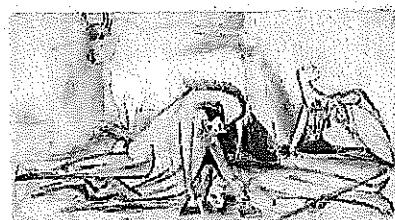
(2) ビデオ鑑賞 美の巨人たち ピカソ「ゲルニカ」

ピカソは、「ゲルニカ」制作後、「絵画は、部屋に飾るものではない。」という言葉を残している。「ゲルニカ」は、ピカソ自身の生まれ育ったスペインで起こったナチスドイツによる大量殺戮を知り、感情が動くままに筆を取った作品である。また、この作品は、その時代や社会との関連の中で、美術が果たす社会的な役割や機能について認識を深めるものとなった。なぜ、この作

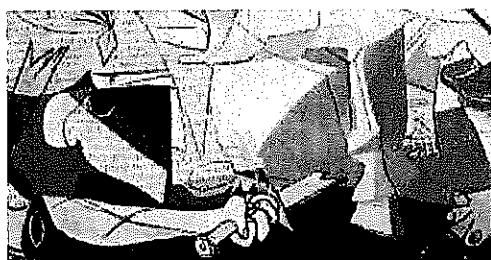
品はモノクロで描かれているのかを考えさせながら、美術は、単に作者個人の自己表現であるばかりではなく、その作品が生まれた時代や社会を映し出す鏡であることを理解させたいと考えた。



ピカソ「ゲルニカ」



ゲルニカのための習作



踏みにじられた兵士が持つ一輪の花



我が子を抱く母

(3) 「私たちのゲルニカ～明日への願い～」

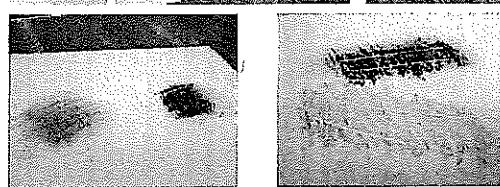
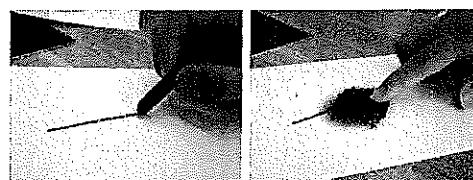
この題材の指導にあたっては、「報道写真」というものに目を向け、現在の社会情勢に素直に向き合うようにしたいと考えた。これから社会を生きていく中で、平和や命の尊さについて再認識する上でも、この作品を取り上げる意義は大きいと考えた。ピカソも新聞の報道写真から衝撃を受けて、「ゲルニカ」を制作したという逸話から、現代の報道写真と比べながら、ゲルニカの作品に込められたメッセージを読み取り、ピカソの心情に触れながら、生徒自身の生き方に関わる作品をつくることができるようとした。学級で集めた新聞の写真を印刷して全員に配り、よりよい作品をつくる意識付けを行った。アイデアスケッチをもとにコンテや鉛筆を使い、「ゲルニカ」のように形と色のコントラストを大切にしながら、白黒灰色で工夫して表現していた。新聞の写真の中から報道写真を資料として扱ったので、その内容を読み取りながら、現代社会に生きる自分たちを、これから生きる自分たちのことを考えながら表現していた。生徒のつぶやきから、彼らは決して悲しい世界はつくらないだろうと感じた。



板書計画



アイデアスケッチを
もとに描く



タッチの工夫

○ 第4次の学習

(1) 目 標

- アイデアスケッチをもとに、白黒灰色のコントラストを工夫して表現することができる。
(創造的な技能)

(2) 本時のねらいと新聞との関わり

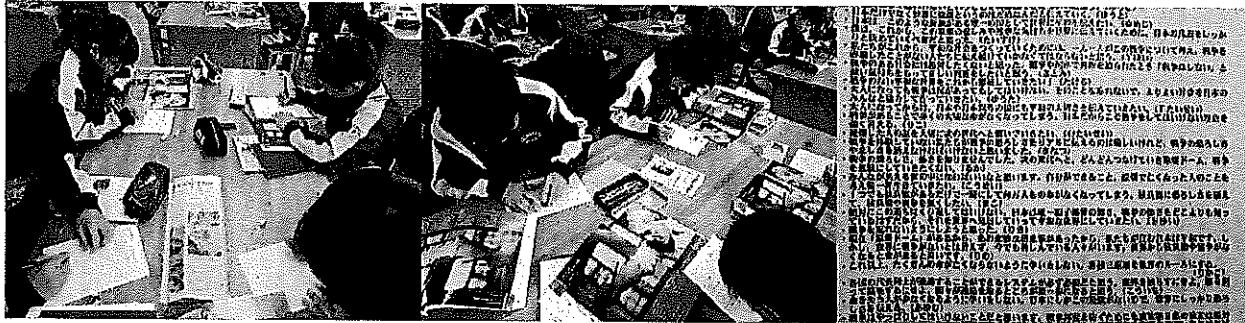
新聞の写真の中から報道写真を資料として扱い、その内容を読み取りながら、現代社会に生きる自分たちについてを表現させたい。

(3) 準 備

新聞資料、アイデアスケッチ用ワークシート、画用紙、コンテ（黒、白）、色鉛筆、鉛筆、

(4) 展 開

学習活動・内容	授業形態	指導上の留意点（◎：評価の観点【方法】）
1 学習課題を確認する。 新聞資料を参考にして、コンテを使い自分たちのゲルニカを表現してみよう。	一斉	※「分かる」「できる」「楽しい」が実感できる学習の手立て ・参考資料を提示し、自分たちの新しいゲルニカをつくることを確認することで、作品づくりへのイメージを膨らませる。
2 コンテの特徴と使い方を確認する。 【予想される生徒の反応】 <ul style="list-style-type: none">・コンテの特徴　強い黒と強い白　変化のある灰色　鉛筆との併用・技法　力を入れた強い線、弱い線　手でこする面の表現　綿棒などでこする表現　濃淡をつける表現	一斉	・コンテは、鉛筆とは違いクレヨンに似た描画材であることを伝え、描く力の加減で濃淡をつけることができることを感じ取らせる。 ・イメージを強く伝えるために濃い黒と濃い白、灰色の違いをつけることが必要なことを確認させる。 ・コンテの使い方を確認しながら、グループで話し合わせる。 ・お互いの考え方やアイデアをメモしておき、作品に生かせるように助言する。 ※グループで話し合うことで、イメージに合う色の調子を考えさせるようする。
3 コンテをつかい、自分のイメージで描きたい世界を表現する。 【予想される生徒の反応】 <ul style="list-style-type: none">・コンテの持ち方を工夫できる。　立てる持ち方、横にした持ち方・黑白灰色の調子を付けられる。・画用紙に写したときの白い線	個人	・既習内容であるゲルニカは白黒灰色（無彩色）で表現されていることを重視し、色に頼らないで形をしっかりと描くように助言する。 ・友達のいろいろな捉え方を認め、のびのび制作できるような雰囲気づくりを心がけさせたい。 ・形の大小や線の太さで印象が変わることを伝える。 ・描きやすい場面から描くように指示する。 ・グループで作品を並べ鑑賞し合い、濃淡のとらえ方を認め共有させる。
4 グループで鑑賞する。 (1) お互いに黑白灰色の印象を比べる。 (2) 友達の表現について知る。	グループ	※並べた作品と写真資料を比べ、お互いの作品づくりに有効なアドバイスを伝え合うように助言する。
5 本時のまとめをする。 写真資料を意識しながら、コンテを使い明暗を表現することができた。	グループ	・グループで作品を並べて相互鑑賞しながら、それぞれの黑白灰色の使い方、コンテの使い方を鑑賞し合うように助言する。 ・制作が進まない生徒には、個別に助言する。 ◎コンテをつかい、明暗を丁寧に表現している。 (作品)
6 次時の学習課題を知る。 お互いの作品を意識しながら、自分たちのゲルニカを仕上げよう！	一斉	・3年生全員の作品がそろったときが完成だということを伝え、最後まで意欲をもって制作を進められるように助言する。



お互いの作品・教科書の詩から感じたことを書いていく

III 研究の成果と課題

1 成果

鑑賞と表現を関連付けた授業の実践では、より深く作品や作者について知り、生徒自身の作品に生かすことにポイントを置いた。3年生「ゲルニカ」では、この作品の時代背景や制作意図を知ることによって、作品の意味や価値の理解を深めることができた。資料として新聞の写真を収集し、それらを基に自分たちの「ゲルニカ」の制作に取り組むことで、黒と白と灰色で描かれたゲルニカのような戦争が起きない社会になることを、生徒たちは心から願うことができた

道徳教育との関連を図りながら鑑賞指導の充実を図り、

自己を振り返ることにより、今を生きることへの感謝やこれ

からの社会に夢や希望を持つ心豊かな生徒を育てたいと考えながら指導に当っててきた。3年生に今までの中学校に入学してからの美術の授業についてのアンケートを行ったところ、数少ない授業時間であっても鑑賞の充実を図り、生徒にとって身近な題材に取り組み、教師のその題材に対する思いを伝える授業を実践することで、生徒たちは、知識や技能だけではない心の成長を感じていることがわかった。今を生きていることに感謝し、自分のこれから将来に夢や希望をもっている生徒が多くいることに嬉しさを感じた。



「3年1組のゲルニカ」

2 課題

「人は、この世界を美しいと感じるとき、生きる喜びや生命の大切さを感じる。美しいものは、それを感じ取る心がある分だけ存在する。だから、美しいと感じる心をもちたい。」私はこの言葉が好きだ。私は美術科の授業を行いながら、美術が生徒の多くを形づくっていると思っている。今、グローバル化に対応した教育が進んでいるが、まず日本の文化をしっかりと知る時間が必要である。そして、日本の文化を教える中には、「美術」の授業にしか教えられないことがある。造形的なつくる力を育む特性、人の幸せを願い形にする心の教育としての特性、文化を理解する特性がある「美術」を教えることが大切なではないかと思う。美術教師は、生徒とともに美術を学ぶ意味を問い合わせながら指導に当たっていきたいものである。そして、柔軟な働きかけや言葉かけをすることで、生徒自身が、自分の個性を自覚したり友達の個性を理解したり、ものの見方や感じ方を広げることができる、そのような美術教師でありたいと思う。

<参考文献>

文部科学省新中学校学習指導要領解説 美術編（平成29年7月）

日本文教出版 形Form